

心理学知識の実生活への提言（その3）

【3 社会的存在になることについて】

3. 1 狭い領域への固執の除去

困ったときに自分の得意な領域に逃げ込む、というのは人間誰しもが持っている行動傾向である。外でいじめられた子供が家の中に逃げ帰るようなものだろう。世の中にはそのような人々が存外多く、ひどい人になると、絶対に自分の得意な領域から外へ出ないで（考え方、言葉の使い方等）物事に対処しようとする人さえ存在する。時にはその話の範囲の狭さに僻々さえすることがある。

既に述べたとおり、現実社会で起こっている事柄は、決して一つの要因ばかりで起こっているわけではない。しかし残念ながら、そのように考えている人たちがいるのである。多分これは、その人の物事に対する自信のなさに起因しているように思えてならない。そして、そのような人はきっと誰でも心の中では薄々そのことを自ら承知しているのである。したがって、どことなく自信がないような顔つきや態度になってしまい、解釈が難しい事態に遭遇すると得意な領域に逃げ込んで、一定の説明概念で事を済ませようとするのである。そうすると、このような人は、物事の説明は出来ても現実の原因の除去や対策の立案にはなにも出来ないのである。

この問題の解決のためには、一度その退路を塞いで問題に取り組んでみる必要があるだろう。それによって時に大恥をかくことがあるかもしれないが、一度それをやってみないことには、自分の得意な事の有効性さえ当の本人が理解できなくなってしまうのである。一度心の衣を脱いで、現実社会の中に飛び込み、敢えて火中の栗を拾うという気概が必要なのである。幼児が母親から離れ始めるのは何歳ごろからだったか、に思いを馳せて頑張ってみたらよいだろう。

3. 2 集団・組織への影響力

社会的影響力を保持するには現実的な問題解決が出来ることが必須の条件である。時にそれは、財政力、政治力であったりもするが、この世界とも無縁であるというのでは社会的な力、すなわち現実問題の解決力にはならない。

例えば、ヒューマンティーの立場に立って入居者中心の福祉施設の建設を思い立ったとして、自らは崇高な理念に裏打ちされた理想的な施設を思い描いたとしても、現実には土地を確保し、建設費を生み出し、運営資金を調達して人員を確保する力がなければその理想は実現できないであろう。立派な考えを持っているというだけでお金が集まるほど世の中は甘くないのである。

具体的にその個人に何が出来るのか、その行為に結果は社会的価値をハッキリと生み出しているのか、現実の社会ではこのことがまず問われるのである。したがって個人レベルからでも、はっきりと誰にでも分かる形で提示できなければならないのである。自己満足的な考えや方法だけでは社会的な力にならないということに気付く必要がある。ここにあるので

ある。だからといって先に述べたように金持ちになる必要があるというのではない。もしこのことをそのような意味合いとして理解するとしたら、すでにそれは世の中の仕組みの理解に欠けている証拠であると言えるだろう。重要なポイントは社会的な影響力なのである。言ってみれば、一個人としても、政治的な力、財政的な力を有している領域に対して影響力が行使できるかどうかということである。

3. 3 幅広い人間関係

前項の指摘事項とも深く関係するが、人間関係において幅広い交友関係を持ち得ない、と言うのでは困難な場面が多いことになる。観察するところに依れば、同じ年代や同じ職場の仲間同士では結構群れているようだ。ところがこの輪が外に向かって広がっていかない人が多くいるのも事実である。例えばそれが広がったところで、せいぜい学校や職場の他の部署の仲間ぐらいまでである。実社会で一つの仕事をしようというからには、この輪は横に広く拡大していると同時に、縦方向にも高く深く広がっているのがポイントである。上というのは、時に社会的権力階層の上という意味でもあるし、下というのは末端の一市民（最近では外国人労働者も含めて）という意味でもある。人間関係の社会的な効用性（縦関係の上方向に関係して）については既に述べたとおりであるが、下方向については、自らのこととして、キャリアに関係なく現在集団の仲間以外の交友関係を考えれば、誰でもその数の少なさに驚くはずである。だとすれば、友人以外の人たちの生活心情やライフスタイルを、生身のままには知らないということになる。一度は相手の立場に立って本当に考えてみる、ということが他の人を理解することの本質だとすれば（カウンセリングの心）、自己の生活の中にその情報が取り込まれていなければ不可能である。最近話題になっている日本社会の国際化に関して言えば、どれだけ多くの外国人の友人を持っていますか、なかんずく、どれだけ多くの発展途上国の友人をもっていますか、という例でもよいだろう。欧米系の友人にはせっせと手紙を書くけれど、アジア系の留学生の面倒は見ようもしない学生がいる。これなどが日本外交が三流だといわれるルーツの一つとなっているともいえる。このようにそれぞれの生活信条に合った「幅」を意識した人間関係を持つことが実社会では大変重要な要素となっていることに気付くことが大事である。

（つづく：次号が最終

【4 人としての資質について】

4. 1 地道な努力の継続
4. 2 世俗的欲求からの脱却
4. 3 見当識の保持

